

龍門・蓮華洞右脇菩薩像をめぐる

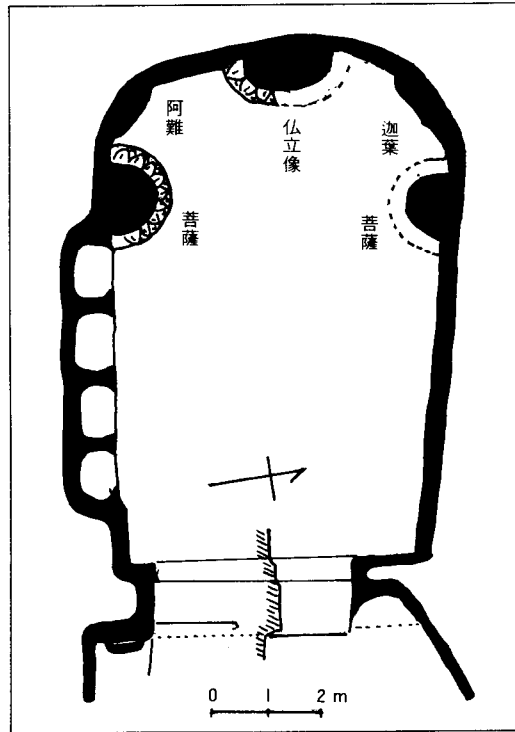
仲 嶺 真 信*

1

すでに筆者は、芸術学論叢第6号において、龍門石窟の復元の問題と関連させて蓮華洞左脇羅漢(迦葉)像について論及したが、その際本論の主題となる蓮華洞右脇菩薩像については詳しく触れずにいた^①。しかしその後、大阪市立美術館においてこの像を実見する機会を得たので新たな知見を持つことができた。今回は、すでに拙稿において少し指摘したことであるが、蓮華洞の諸問題を解決する上で、看過することの出来ない存在である本像について、以下に関連する諸像との比較をしながら具体的に述べていこうと思う。

まず、本像の様式的特徴を述べる前に蓮華洞内部の構造および仏像の配置について簡単に触れておこう。

石窟の構造は、奥行き長い馬蹄形の平面を持ち、奥壁(西側)の複弁蓮華座上に高肉彫りの仏立像一軀、奥壁左右に薄肉彫りの羅漢立像二軀と、左右壁(北側・南側)に高肉彫りの菩薩立像二軀を配置している(挿図1)。本尊台座は、複弁部を三葉半ほど残し、あとは欠損している。また、本尊の頭部と両手足も他の諸尊同様大正末年以前にすでに失われている。なお、温玉成氏は、この本尊の像容と類似する古陽洞の延昌年間(512~515)銘を持つ仏像との関連から、その像造の時期の下限を延昌年間に求めている^②。



挿図1 蓮華洞平面図

一方、羅漢立像二軀は、左脇(北側)に迦葉、右脇(南側)に阿難を置くが、いずれも雨天の際に、壁面内部から滲み出てくる石灰分を含む水分のために像容が甚だしく荒らされたり、もしくは崩壊している。とりわけ阿難像は、全身に広く石灰分を帯びて、惨たらしい姿に変貌している。菩薩立像二軀のうち右脇侍(図版1、詳論は後述)は、頭部に摩尼(非珠)宝冠を戴き、右手に蓮蕾、左手は衣端を持つ。また、左脇侍は摩尼のない大きな宝冠を戴き、右手に摩尼宝珠(珠状)、左手に環状の持物を握る。いずれも当初は、ほぼ完全な右脇侍台座から推測すると、本尊同

*別府大学アジア歴史文化研究所研究員

様、複弁蓮華座上に立っていたと考えられるが、左脇侍は台座の蓮弁部がほとんど崩壊し欠失、また両足も欠損している。なお、右脇侍左足の甲はほとんど磨滅しているが、逆に右足のそれは、いくぶん磨滅しているもののそれでも指の線がある程度判別できる。これらのうちとくに左脇侍の台座および足先部の場合は、もともとの亀裂に浸水が進み、自然に壊れたものと思われる。

なお、これらの五尊のうち、完全に体軀が揃っているのは、どれ一つもないのが大変寂しい現状である。とりわけ、頭部(顔面)がことごとく人為的に無残に剝がされているのが、いっそう荒廃とした印象を強めている。さらにそればかりか、その所在の確認すら困難かつ詳らかでない現状ではあるが、その中でも、幸いにも筆者が実見し得たのは、現在パリのギメ博物館の所蔵になる旧蓮華洞左脇羅漢(迦葉)立像(図版2)と本論の旧蓮華洞右脇菩薩立像の二軀の頭部断片のみである。鼻肩目でいうわけではないが、この二軀の頭部断片となった彫像は、中国仏教彫刻の中でも、至宝とでもよぶべき優品であるだけに、今日、蓮華洞内において拝観できないのが至極残念である。

ところで、蓮華洞天井には、その名のとおり、浮き彫りの大蓮華が配されており、龍門随一の見事な藻井を形作っている。その周りには、蓮華化生像や雲をともなった天人が六軀、それぞれ手に香炉、宝器、天蓮華などを捧持しながら、本尊(釈迦)の方へ向かって、左右に三軀ずつ圍繞する姿で配してある。しかし、残念なことには、これらの龍門様式を代表する天人群も一軀を除き、他は全て顔を欠失している。なお、温玉成氏は、これらの天人群の造像期について、ほぼ、502~517の間と比定している。^②

左右門については、図(図版3・4)のように

なっており、そこには当時の信仰の実態を知る上では、とても貴重な像造銘が数例確認される。まず、右壁は、不規則な配列で、上中下層の三段になった諸仏龕を中心として、余壁に小龕が並ぶ。右壁中には、北魏銘の造像記が三例ほど認められる。一方、左壁は、開鑿当初から壁面の岩質が悪かったようで、下層は、蓮華洞入口から奥壁へ向かって斜めに層をなす岩肌が走っている。その上層には、右壁に比べさらに不揃いな諸仏龕が乱れて配置されている。左壁中には、北魏銘の造像記が割りと多く、八例ほど認められる。先述のように、延昌年間(512~515)にその開鑿時期が遡れそうであるが、あくまで造像記に基づくかぎりでは、蓮華洞の造営活動は、正光二(521)年頃から遅くとも北魏末年にかけての頃には、大半が終了していたものと考えられる。この頃は、北魏龍門様式の繁栄期というべき時期であり、さらに厳密な様式史上の分析を通して見ると、北魏龍門様式が南朝様式の影響を色濃く受けているとする吉村氏の重大な指摘^③があり、この点からも、蓮華洞像造様式を微細に分析・検討していく必要がある。先述のように、今日の蓮華洞は仏洞全体が人為的にも自然的にもことごとく破壊を受けており、大変無残な空洞になりはてている。しかしながら蓮華洞は、北魏龍門様式史上看過できない貴重な仏洞であると同時に、中国仏教彫刻史においても、屈指の仏教遺跡として注目されなければならないといえよう。

2

さて、次に先程簡単に触れた旧蓮華洞右脇菩薩立像に戻って、今度はいっそう詳しく像容を観察してみよう。なお、本像については、すでに『龍門石窟の研究』の著者が、言及している

ので、本論では今しばらくそれに基づいて述べていくことにする。ただし、前掲の著者は昭和16年の初版発行以来だいぶ年月を重ねてきているが、その間増補も改定もなく今日に至っている。つまり、今日の研究状況から見ると、その間の学術の進展も加味せざるを得ず、したがって、訂正および補遺を加えるべき点など多少の問題を抱えていることも厳しい事実である。

それでは、まず引用に入るが、後程批判的な観点を加えながら触れてみよう。

「奥壁は湾曲しているので、左右の脇侍菩薩はまったく方向を転じて南北面する。身長約四メートル。右方(図版1, 11)はまえだて、わきだてをもった高い三面宝冠をつけ、冠とともに頭部はやや長大である。眉目は秀麗、鼻すじとおり、口脣には婉として古拙笑をたたえる。瓜実顔の、頬から細まった頤にかけての柔和さも、そのきずのない石肌とともに清純そのもののごとく感ぜられる。こんな面相の静けさのなかに、北魏仏教が美術と融合した崇高さがあるのではなからうか。しかし、惨酷な土民の手によって、いまこの美しさは永遠に失われている。われわれはこの美しい面相を脳裡にえがきながら、のこされた菩薩の手足を凝視する。蓮の蕾をもった右手は右胸につけ、衣端をもった左手はすこしかがめて腰につけているが、その手先は美しく柔軟にみえる。すこしつきだした腹のあたりに璧環がみとめられる。その璧環を通じて、両肩から下がってきた天衣と連珠とが、X字形に交叉している。さらにしたにたれた衣裳は両足の間でくぼみ、両足をうかせ、その衣端でおおまかな美しい波状をつくっている。賓陽洞の諸仏ほど幅がなく、それだけどっしりしたところがないが、神経はこまかく、その衣

端のさばきや宝冠の紐の翻転などもみのがしがたい。

この右方の脇侍の光背(図版5)は宝珠形で、うちより蓮華、唐草文帯、火焰縁飾というふうになっている。宝珠形の上縁にそうて何かせまい幅のかざりか、おおいのようなものがついているのは、ここではほんの残存形式にすぎぬが、雲岡石窟の光背ではかなり顕著な装飾である。

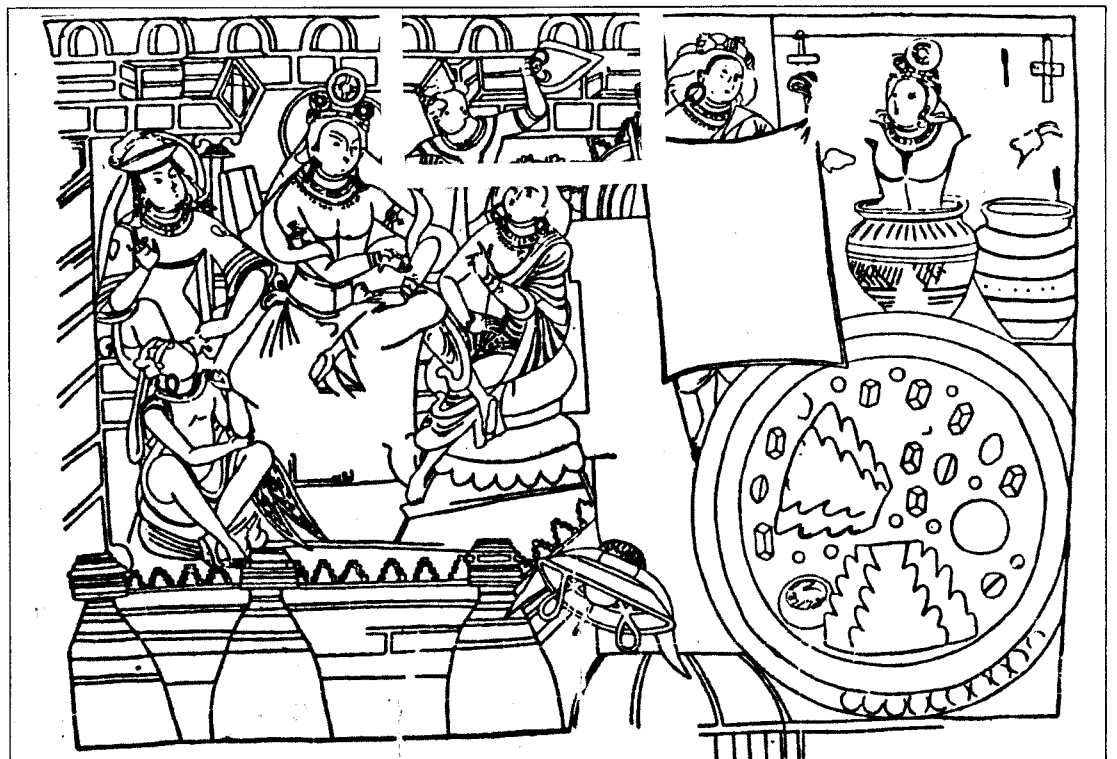
左方の脇侍菩薩の頭部は身体に比してやや大きく作られていたが、これもいまではなくなっている。頭が大きく、下すほまりの顔で口脣の湾曲が特にきつかった。宝珠光背はほぼ同様であるが、宝冠はちがっていた。これには一連のたてものを左右までめぐらし、その内部にうつくしい、こまかいほりがあり、正面上端には新月形があった。胸から腰にかけては地下水の浸透によって、はこばれた石灰分が固着し、足もとは同じ水の浸蝕のために破損しつくしている。しかし、その肩の優しい輪郭をみて、両手さきのおどろくべき自然の表現におよぶと、われわれの目はしばしここに凝集される。宝珠(図版6)―あるいは蓮弁であるかも知れない―をもった右手は右胸につけられ飾環(図版6)―これも何だかよくわからぬものである―をもった左手は左腰にそう。その飾環をもった指の柔軟さ、なめらかさ、あたかも血の通っている皮膚をみるようである。腕からひるがえった衣のはし、また肩にかかっている衣のはしをみよ。ここにもこの像の非凡な美しさ^④が感得される。」

ところで、右脇侍の宝珠形光背の上縁に沿って付随している一見覆いのようなもの(図版5)は、凝視すれば明らかに『龍門石窟の研究』の著者の誤認であることが判明する。すなわち一見覆いのようなものは、造像時の下地(鑿痕が残

る)が、たまたまその様に残ったのであり、装飾ではない。同じ下地は天井部にも相当認められる。ここで仮に半歩譲って、同様の覆いのようなものが、他のもう一方の脇侍菩薩(図版7)は無論のこと二羅漢の宝珠形光背上縁にも蔽存するならば、そのような判断が決して間違いとは考えられないが、この場合やはり事実と違うので誤認としか考えられない。したがって、この誤認に基づく見解をそのまま雲岡において確認される光背の上の覆いのような装飾と短絡的に繋げることも危険といわざるを得ない。光背の上縁に沿って付随している一見覆いのようなものは、雲岡からの残存形式そのものでは決してないことは、明白である。なお、右脇侍は、いわゆる宝珠形光背を頭光として付けている点においても、また、後述のように、日本の法隆寺の百済観音や救世観音両像の宝冠の冠帯におい

て認められる珠状の装飾(四葉の花弁に包まれた青色ガラス製の宝珠、図版8)と同様の意味の宝冠装飾を持つ点においても、法隆寺の両観音像との相関関係を指摘することができる。さらに同様の関係は、後述のように、とりわけ百済観音像に認められるX字状天衣と、裳の結び紐の中心飾りとしての環についても重ねて指摘することができる(図版9)。

一方、左脇侍の右手の持物は、「あるいは蓮弁であるかも知れない」として明言を避けておられるが、管見によると歴然たる珠状「宝珠」であり、しかもそれが、いわゆる宝珠形(蓮弁状)の焰に包まれているのである。さらに、「これも何だかよくわからぬものである」とされながらも、「飾環」と命名されている左脇侍の左手の持物は、例えばキジール壁画中に散見される同様の形状の環と酷似している(挿図2)。つまり、こ



挿図2 Höhlengruppe bei der Kaminhöhle A. <Alt-kuscha より>

れは神聖な威徳を象徴するような持物と考えられる。

この環状の持物は龍門の他の諸洞においても数例確認されるが、右脇侍の宝冠に安置される非珠の宝珠とこの環状の持物を一躯の菩薩において同時に合せ持つ代表的作例は、まず龍門の普泰（第14）洞奥壁右脇菩薩像（図版10）が挙げられる。この像は、おそらく、蓮華洞右脇菩薩像の後を受けて造像されたものと考えられる。なお、雲岡においては、環状の持物と非珠の宝珠とを同時に持つ菩薩像は一例も確認されない。

ついでながら次に一部重複するが、蓮華洞諸尊について、水野清一氏は『中国の彫刻』の中で、以下のように簡潔に紹介している。

「龍門には、もうひとつの有名な北魏窟がある。それは、蓮華洞である。立像の仏を中心にした五尊像をおさめてる。本尊は、大きな舟形の拳身光をせおい、すらりと正面きった立ちすがたは、じつに端正であるとともに優雅である。細おもて、長身であるが、重量感はある。あさい衣裳のひだはあまり目立たず、全身をつつんでいる。脇侍菩薩は本尊に似た長身の優雅な像で、賓陽洞脇侍菩薩にひじょうによく似ている。目鼻だちは鮮鋭で、宝冠の彫りがひじょうにふかい。^⑤」

ここでは右脇侍菩薩が、賓陽洞脇侍菩薩にひじょうによく似ていると水野氏は述べておられるが、管見によると、両者は、後述のようにいささか相違しているので、ただちにこの見解には左袒しかねる。

ともあれ、以上のように、水野、長廣両氏は、蓮華洞両脇菩薩像について、ある程度具体的な像容の観察を行っておられるが、そこにはすでに指摘したようにある種の誤認が認められたり、あるいは、断定や明言を避けられておられ

たり、さらには認識のずれなどが確認された。そこで筆者は、とくに本論のテーマとなる右脇侍菩薩像について、以下に現地調査を踏まえた上での現状を可能なかぎり述べていきたいと考えている。すでにくぶん言及してきたが、以下に像容の観察を再度具体的に行いながら、補足説明を加え、さらに引き続きその芸術的意義について触れることにする。

3

現在、大阪市立美術館所蔵の旧蓮華洞右脇侍菩薩頭部断片（図版11）には、原所在の蓮華洞壁面から剝離した時生じたと考えられる痛々しい傷痕や見苦しいきざぎざの剝離面が認められる。このことは、かつて触れた現在パリのギメ博物館の所蔵になる旧蓮華洞左脇羅漢（迦葉）立像頭部断片についても同様であり、ひいては、龍門全体の厳しい現状を呈示していると考えてよい。^①旧蓮華洞右脇侍菩薩頭部断片像の場合、右耳部は三角窩部から対輪部に隣接するすぐ後ろをとおって耳垂（耳朶）のやや中央部後ろ寄りに至る亀裂線が走っていて、その顔面部寄りの部分は残存するものの、あとは損失している。一方、反対側の左耳部は上部の耳輪部をはじめ全体的に剝離面が著しく増大しているが、かろうじて顔面部寄りの部分は輪郭が認められる。しかし、右耳部に比べると破損度はいっそうはなはだしい。すなわち、耳甲介部、対輪部、耳垂（耳朶）部などわたって剝離や破壊が目立ち、その結果亀裂線がかなり複雑に入り込んでいる。なお、右頬部にも亀裂線がぎざぎざに入っていて、首の付け根あたりまで走っている。

ところで、大阪市立美術館所蔵の旧蓮華洞右脇侍菩薩頭部断片に関する現状の法量は次に示すとおりである。

総高	89.2
顎～髮際 (面長)	40.6
面幅	37.2
奥行き	髮際隆起部～顔面部裏 27.0
	鼻先～顔面部裏 25.0
両耳間幅	最大 45.5 最小 34.3
右耳長	28.0
左耳長	32.0
口幅	11.2
鼻幅	10.9
鼻～顎	12.8
顎～眉	右 31.0 左 30.0
上脣先～顎	右 23.5 左 23.0
宝珠本体	高さ 14.7 幅 8.7
宝珠背後の舟形光背	高さ 23.2 幅 21.9
	(すべて単位はcm)

以上が、当面本論にとって必要な法量であるが、菩薩頭部をその目鼻の高さで正面から詳しく観察した時に、左右の目の位置がわずかに(約0.5cm)ずれていることに気がつく(もちろん、目のずれに応じて、眉のずれも生じている)、このずれについては、例えば、人間の顔面が、数学的に左右対象でないのと同様に、むしろ、ごく自然な面貌の繊細な表現の一つと考えたほうがよい。後程、五尊形式中における造形的・空間的意義を述べる際に詳しく触れることにして、ここでは今しばらく像容の観察を続けよう。

水野・長廣両氏の先程の指摘どおり、菩薩頭部は、装飾として、わきだて、まえだてを持った高い三面宝冠をつけているため、全体としてやや長大である。冠帯に認められる三ヶ所の環状の装飾は、宝冠最頂部に見られる三つの環状の装飾(こちらは、かなり大きい)と共に、例えば、珠状の宝珠のような象徴的な形態と考えられる。ちなみに、わが国の法隆寺にある百済観音や救世観音の宝冠の冠帯において認められる珠状の装飾(四葉の花弁に包まれた青色ガラス製の宝珠)

と同様の意味を持つものと考えられる(図版8)。

さらに、冠带上部のいわゆる舟形光背の形状をしたものは、その中央部に縦長の五角形の輪郭をした特異な宝珠本体が認められることから、明らかに宝珠の威光を示す焰が、蓮弁状(いわゆる舟形光背の形状)で表現されたものと考えられる。なお、宝珠本体は、さらにその内部に、Y(もしくはV)字形の表現が認められるが、これは中央アジア一帯に散見される同種の宝珠に特有の非珠(圭状)の形態をした宝珠自体の立体的・多面的表現である。このような宝珠については、すでに拙稿^⑥において言及したので、ここでは詳しく触れないが、菩薩頭部に安置する作例は、雲岡石窟においては一例も確認できなかった。しかし同種の作例は、龍門においては、賓陽中洞をはじめとする北魏諸洞、さらには、鞏県石窟、莫高窟などにおいても、菩薩のみに限らず供養者の頭部にも検出される^⑦。つまり、現在の段階では、管見によると、広範な伝播経路を持つ非雲岡的な表現になる作例としての「摩尼宝冠」が、龍門北魏窟においてかなりの成熟度を持って成立したのと考えて良い。もちろん、この種の宝珠の起源は、さらに龍門北魏窟以前に遡れるものと十分推測される。

ところで、冠带上には、宝珠の両脇に挿した蓮蕾状が認められるが、この点についても、非雲岡的な表現になっている。この蓮蕾状は、賓陽中洞の同種の「摩尼宝冠」の作例と比べてみると、その位置が賓陽中洞の場合には、パルメットに代わっていることが分かる。冠上の宝珠の両脇に配置されるのが蓮蕾状であれ、パルメットであれ、いずれの場合においても、前述の宝珠との組み合わせによる表現は非雲岡的な、換言すれば、北魏における「摩尼宝冠」に見る龍門的特徴といえよう。

ここで再度、面貌の表現に注目してみよう。

全体として気品のある静かな面持ちであり、その細部の表現を詳しく見ると、眉目は秀麗で鼻筋はとおっており、唇にはアルカイクスマイルを湛えている。とりわけ、臉の表現が、賓陽中洞の同種の菩薩像に比べて、いっそう瞑想的である。つまり、賓陽中洞の作例(図版12)の場合は、臉の表現に関して上下の臉の先がほぼ同様の弧線を描く単純な紡錐状であるが、逆に、蓮華洞菩薩像の場合には、上下の臉の先がやや下降ぎみに微妙な弧線を描き、細く、しかも伏し目がちな繊細な表情に整えられている。このような表情は、かなりの洗練された工人の技量を持ってはじめて可能であったと考えられる。しかも、すでに触れたように、蓮華洞菩薩像の場合には、この像の目鼻の高さで正面から見た時、両目の位置が微妙にずれている。つまり、右目の方が左目に比べてわずかに上がっている。しかし、このずれは、後述の様な石窟内の構造や諸尊の配置を十分考慮した上での視覚(覚)的効果を狙ったものと考えられるのである。このことについて考えていく前に、われわれはもう一度、石窟内部におけるこの像の配置について注目して見てみよう。

石窟の構造は、奥行き長い馬蹄形の平面を持ち、奥壁の中央に本尊の仏立像と奥壁の両隅に羅漢立像二軀を配し、さらに、左右壁奥寄りに菩薩立像二軀を両脇として置く。つまり、この一尊二羅漢二菩薩の構成からなるいわゆる五尊形式を中心として、その周りに諸仏龕が並ぶ配置となっている。当然のことながら、左右壁奥寄りの壁と隣接する奥壁の両隅に位置する二羅漢像は、石窟の構造上の理由からも、奥壁中央の本尊にそれぞれ対面するような姿勢で配置されている。ところが、二菩薩像の場合は、それぞれの顔や体軀が直接本尊に対面せず、むしろ、両菩薩自身が相対する配置となっている。

もちろん、信仰上の意味においては、二菩薩も二羅漢も同等に中央の本尊(釈迦)に対して求心的構成で統一されていることは、改めて指摘するまでもない。

さて、石窟内において、重要な形式を成す五尊の彫像を自然な姿勢で一望することのできる位置は、おそらく、石窟平面(床面)上の中央部か、もしくは、そこから少し下がった位置に求められよう。その位置は、供養者が立ち居し礼拝するに際しても、さらには、工人(設計者もしくは彫像を完成させた人)が、石窟の中心を成す五尊全体を一望の視野の下に入れ、かつその造型的処理を施す時のバランスを考慮するに際しても、最も相応しい位置と考えることができる。したがって、もし、われわれがその位置から右脇菩薩立像を当然のことながら仰ぐように拝観するならば、先程触れたこの像の左右の目のわずかなずれが、それと感ぜさせないほど、ごく自然な表情として見えてくることに気づくであろう。この様に、右脇菩薩立像を左斜め前にして対面し拝観する時、適度の距離を置いて仰ぎ見ているために、両目の微妙なずれは、かえって視覚(角)的に感知し難くなっているのである。ちなみに、とくに左目の内眦(目頭)は、右目に比べ彫りがはっきりとしている上、しかもより鋭く斜め下方へ示されている。このため、正面から見る場合いっそう両目のずれが強調される結果となる。ところが、この像に向かって左斜め側から面貌を詳しく観察すると、先程の左目の内眦(目頭)は、自然に鼻梁部の陰に隠れて見えず、逆に両目の上臉の線が緩やかな均衡の取れた連続した弧を描いて見える。この像は、本来石窟内においては、配置上あえて向かって右斜め側から拝観する必要はない。したがって、向かって左斜め側からの視角を主として、その反対側に従の関係を保てばよいことになる。要

するに、両目の微妙なずれは、石窟内における諸尊の配置や構造を十分考慮した上で、拝観者が自然に求める可能性の高い視角(覚)や視点に立って見ると、あまり気にならない。このような視角(覚)的效果を持つ類例としては、やはり、同じく蓮華洞左脇羅漢(迦葉)立像(図版2)が挙げられる。この場合は、像に向かって右斜め側からの視角(覚)に8~9分程の比重がかかる。なぜなら、この像は、奥壁と左壁とが湾曲を描いて接する隅壁に位置している浮き彫りであり、この際その反対側からの視角(覚)は、配置上の制約もあり重視することが困難であり、また、その必要もない。念のため、反対側に視点を移動してみると、図(図版13)のように大変歪な像容が現れてくる。このような場面からの視点や視角は彫刻を施した工人のみが、制作の過程上必要とするものである。拝観者にとっては、像に向かって右斜め側からの視角(点)が最大限の美的効果をもたらすのである。

4

ところで、右脇菩薩立像の頭部以外の造像的特徴は、すこしつきだした腹のあたりに壁環がみとめられることである。その壁環は、両肩から下がってきた天衣と連珠とが、X字形に交叉している部位に、いく重にも刻まれた同心円をもって表現されている。なお、この壁環については、古来中国人に好まれたいわゆる輪通しの環の伝統が働いているとする指摘がある^⑧。このようなX字状天衣とその中心飾りとしての環の影響と認められる作例は、日本においては、その形状が完全に一致するとはいえないが、まず法隆寺の百済観音像を挙げることができよう(図版9、小金銅仏にも数例ある)。ちなみに、百済観音像の場合、蓮華洞右脇菩薩立像のようにX

字状天衣の中心飾りとして環があるのではなく、裳の結び紐が、ちょうど両膝間の中央で蝶結びに組まれている位置に環が認められる。しかも、蓮華洞の場合は、X字状に天衣の交叉するあたかも臍の位置に大きくそれが配されていたが、反対に百済観音像の場合は、X字状天衣の下、すなわち、膝前に小さく表現されている。しかしながら、いずれにせよ、古来中国人に好まれたいわゆる輪通しの環の伝統の影響と見なすことができる。

このような中国的(漢族的)伝統は、龍門石窟において数例挙げることができる。例えばその一例を示すと、賓陽中洞の左右の腰壁に五体ずつ配置されている十神像が、その典型である。ついでながら、十神像を列記すると、次のようになる。すなわち、山神王、珠神王、火神王、象神王、鳥神王、風神王、龍神王、河神王、樹神王、獅子神王などの神々が挙げられる。しかし、このような十神像の造像例は、『龍門石窟の研究』の著者の指摘を待つまでもなく、雲岡石窟においては一例も確認されない。このことは、龍門と雲岡との間に異質の要素が潜んでいることを示唆する。つまり、龍門においては、漢、魏、晋の漢族的伝統文化の影響が色濃く反映されていると考えることができる。もちろん、このことは、龍門石窟の一側面であるが、雲岡石窟と比べてみると、その傾斜の度合いがいつそう濃厚であることが明瞭である。なお、石松氏は、龍門古陽洞初期において、雲岡とは異質な様式が認められることを指摘している^⑨。すなわち、古陽洞の仏・菩薩の着衣の形式、および仏龕の龕制などを検討された結果、古陽洞様式は、雲岡様式の継承でも展開でもないこと、さらに、龍門の絵画的表現を用いた浮き彫り像は、雲岡との大きな違いであるともいう。例えば、確かに龍門賓陽中洞に見られる皇帝皇后供養図の中

心とする東壁の人物や山岳、樹木などの表現において、極めて絵画的な処理の仕方を行っている。とりわけ樹木の表現においても、東晋の顧愷之の描法に類似するものがあり、絵画上の南朝の伝統が伺える。

石松氏の指摘は、従来の龍門石窟に関する様式観に異議を唱えるものであり、はなはだ卓越した見解で示唆に富むものである。筆者もこの説に左袒するものであり、龍門と雲岡との間に異質の要素が潜んでいることをこの際改めて強調しておきたい。本論の主題であった蓮華洞菩薩像（頭部断片）宝冠装飾に見られる摩尼宝珠の表現においても、雲岡石窟とは異なる別の系統からの直接的影響を想定しなかり龍門様式の解明は難しい。ただし、龍門石窟の古陽洞をはじめ賓陽中洞や蓮華洞などの代表的な北魏窟に展開している宝冠装飾中の摩尼宝珠の表現については、一部中央アジアのキジール壁画に見られる圭状のそれとの繋がりが強い反面、逆にまた一部においては、非雲岡的な換言すれば漢民族的な伝統文化の影響の度合いが濃厚であることも確かである。このような二面性を持つところに龍門様式の特徴が伺える。したがって、様式の解明に当たっては、当然この二方向からのアプローチが必要になってくる。先述の北魏窟は無論のこと蓮華洞菩薩像の宝冠装飾に見られる摩尼宝珠の表現をめぐって、その直接的影響を与えた場所はどこにあるのかの証拠は解明できずにいるが、管見によれば龍門石窟の時代に先行し、しかも仏教文化の隆盛な地域で、かつ漢民族的な伝統文化の濃厚なところという強い推定が可能である。もし龍門と同一の特徴を持つ同時代もしくは先行する摩尼宝珠がどこかで発見されるならば、その地域が龍門における造像様式の主流となった地域であろうと考えられる。その意味でも、龍門石窟の時代に先行する

例えば南朝における墳墓の発掘に際して、古陽洞初期から見られる宝珠とまったく同様の、すなわち〈パルメット付着の蓮華上に安置された圭状の摩尼宝珠〉が検出されるならば、龍門様式の起源をめぐる問題も、より一層明確になるものといえよう。

現段階において筆者の研究の帰結は、以上のようなところに落ち着いているが、いずれ中国本土の遺跡の発掘において、筆者の推測を十分に裏付けてくれる出土品や作例が出現することを切に望んでいる。ともあれ本論においては、現地調査を踏まえた上で、蓮華洞内部の構造や諸尊の配置をめぐる問題に注目しながら、特に右脇菩薩像に関連する問題を中心に述べてきた。その中で、すでに水野・長廣両氏の労作『龍門石窟の研究』において触れられたことではあるが、いくつかの問題について、筆者は批判的に再検討を試みることができた。その結果、わずかではあるが、先学の誤認や曖昧な点を指摘し、さらに訂正および明言することができた。このことは、ほんのわずかな研究の進展であるが、しかし龍門石窟全体においてはまだまだ言及すべき未解決の諸問題が多く残されていることもまた事実である。

〔付記〕

本稿執筆の旧蓮華洞菩薩頭部断片の調査に際し、大阪市立美術館阪井卓氏より格別のご高配とご教示を賜った。また当時同美術館の脇坂淳氏にもお世話になった。ここに記して厚くお礼を申し上げる次第である。

註

- ① 拙稿 (1984) 「龍門石窟の復元—バリ・ギメ博物館所蔵・旧蓮華洞迦葉像頭部を中心として—」『芸術学論叢 第6号』
- ② 温玉成 (1987) 「龍門北朝期小龕の類型と分期および北朝期石窟の編年」『中国石窟・龍門石窟 第一卷』平凡社, 202—203頁。
- ③ 吉村怜 (1983) 『中国仏教図像の研究』東方書店・所収関連諸論文。
- ④ 水野清一・長廣敏雄 (1980) 『龍門石窟の研究』同朋舎(履刻版), 43—44頁。初版は1941年, 東京座右宝刊行會出版から発行。原文は旧漢字および旧仮名づかい。
- ⑤ 水野清一 (1960) 『中国の彫刻』日本経済新聞社, 39頁。
- ⑥ 拙稿 (1980) 「中央アジア・トユク遺蹟仏教寺院壁画断片に表現された『宝珠』について」『別府大学紀要 第21号』。
拙稿 (1980) 「雲岡石窟に於ける『宝珠』をめぐる諸問題」『芸術学論叢 第3号』
- ⑦ 拙稿 (1985) 「龍門北魏窟における『宝珠』の表現と展開—非珠(圭)状の『宝珠』を中心として—」『別府大学アジア歴史文化研究所報 第3号』
- ⑧ 田中政江 (1969) 「菩薩のX字状天衣とその中心飾としての環について」『美術史研究 第七冊』
- ⑨ 石松日奈子 (1989) 「龍門古陽洞初期における中国化の問題」『仏教芸術 184号』

図版出典

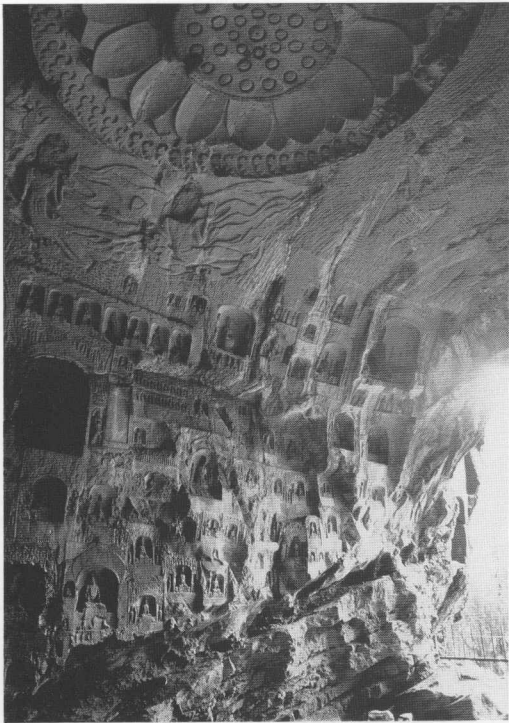
- 1・2・10・山本明『龍門石窟』
- 3・4・5・6・7・13・筆者撮影
- 8・9・『奈良六大寺大観 第四巻・法隆寺・四』岩波書店
- 11・『中国仏教彫像』大阪市立美術館・朝日新聞主催展覧会図録
- 12・東京国立博物館提供
- 挿図1・『龍門石窟の研究』
- 挿図2・A. Grünwedel, Alt-Kutscha.



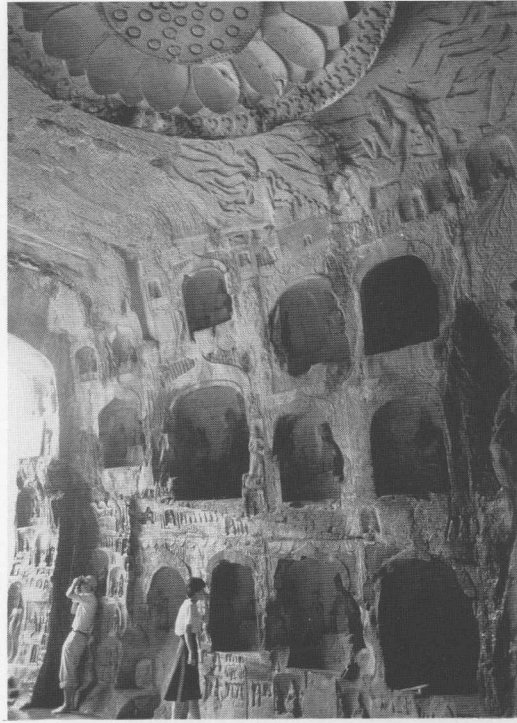
図版 1 蓮華洞右脇菩薩 (旧)



図版 2 蓮華洞左脇羅漢 (迦葉, 旧)



図版 3 蓬華洞左(北)壁



図版 4 蓬華洞右(南)壁



図版5 蓮華洞右脇菩薩頭光部分



図版6 蓮華洞左脇菩薩部分



図版7 蓮華洞左脇菩薩頭光部分



図版8 法隆寺百濟觀音



図版9
法隆寺百済観音



図版10
普泰(第14)洞右脇菩薩



図版11 蓮華洞右脇菩薩頭部断片
(現在大阪市立美術館寄託品)



図版12 賓陽中洞脇侍菩薩頭部断片
(現在東京国立博物館所蔵)



図版13 蓮華洞左脇迦葉
(現在パリ・ギメ博物館所蔵)